
ブラットレイン

Jr.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラットレイン

【Nコード】

N 6 4 5 9 Y

【作者名】

J r .

【あらすじ】

秘密組織から任務を受け、冷静沈着に任務をこなすプロの殺し屋二人。新たに大型麻薬密売組織壊滅の任務を受ける互いに何らかの過去を抱えた二人。無事二人は、任務を成功させる事ができるのか？そして互いが抱える過去とは・・・

第1章

「た、た、頼む助けてくれ！」

昼間のカーテンを閉めきつた薄暗い室内に震えた声で男が命乞いする。昼間の静かな住宅街、微かに近くの公園で遊ぶ子供の笑い声が聞こえる。目の前には、涙と鼻水を流しながら膝まずく中年の男が額にサイレンサー付きの拳銃を押し付けられている。俺は、タバコに火を点け今まさに死にゆく男の姿を静に見ている、窓とカーテンを閉めきつた室内にはタバコの煙の臭いと、恐怖で失禁した男の尿の臭いが混ざり説明しがたい異臭になり室内に充満している。呼吸を乱し鼻水を啜る男が一瞬深く息を吸い込んだ瞬間、パシュツ！と音と共に床に倒れた。静かな室内にドサツと音を立てて倒れた男の額には、風穴が空けられその穴からはまるで開けたてのワインのボトルを倒したかのようにおびただしい量の血が流れている。「行くぞ・・・」そう一言呟くとスパイサイドは、くわえてたタバコを血溜まりに放って足早に部屋を出た、ジュツと音をたて白いタバコは、一瞬にして真っ赤に染まった。俺もタバコを揉み消し、自分の吸殻とスパイサイドの吸殻、そして床に転がってる22口径の薬莢を拾いそれらすべてをビニール袋に入れ小さく丸めて作業服のポケットに押し込み室内を後にした、男の家の前に停めていたバンに乗り込みエンジンをかけその場を立ち去った、白い車体には、「面倒なハウスクリーニング！プロにお任せください！」とペイントされた住宅街には、なんの違和感の無い車だ。しかし掃除のプロ間違っではないが掃除とはいえハウスクリーニングと違い高級なペルシャ絨毯を醜い男の死体とおびただしい量の血で汚した「掃除」である。大通りを避け裏道を使いながら移動する、車のスピーカーから聞こえてくるラジオに耳を傾けながらリクライニングシートを少し下げ目を閉じた、スパイサイドが作業服の胸ポケットからタバコを一本取りだし火を点け深く一吸いし煙を勢いよく吐き出した、一瞬で車

内はタバコの煙で曇った、「しかし悪党のクセに情けねえヤツだつたな」スペイサイドが独り言のように呟いた。「そうだな」俺は、目を閉じたまま軽く答えて手探りで手動式のウィンドウのハンドルを探しだし2回転半ほど回しウィンドウを数センチほど下げ車内を換気した。会話は、それ以上続く事なく車内は、ラジオの音とスペイサイドのタバコを吹かす音しかない状態になった・・・

人間慣れとは、恐ろしいつい一時間前に人を殺めたというのに俺もスペイサイドもごく普通だ、普通に仕事を終え帰宅するのと同じなのだ。スペイサイドとは、5年の付き合いになる相棒だ。スペイサイドは、もちろん本名ではない。コードネームだ、由来は、彼がスペイサイド産のシングルモルトウイスキー愛飲してるからつけたコードネームだ、俺のコードネームは、スペイサイドより、アイラ島のシングルモルトウイスキーのほうが好きだという理由でアイラである。

車と作業服を処分しアジトに戻った、新宿と新大久保の間にある寂れたマンションの一室をアジトにしていた。俺は、まず何より先にシャワーを浴びた、少し熱めに調整したシャワーを頭から五分ほど浴び続けた、これをする事で俺は、依頼された任務を終えリセットする気になる事ができる自分の精神を保つ上の習慣である。身体から湯気を立たせながらバスタオル一枚だけ腰に巻きリビングにいくと、スペイサイドは、ハイネッケンを飲みながらボスに任務完了の連絡をいれた、俺も冷蔵庫からハイネッケンを一本取りだし栓抜きで開けて、喉をならしながら飲んだ。「ボスには、報告は済んだのか？」俺は、スペイサイドに聞いた。「ああ、済んだぜ・・・」テレビから流れるニュースを観ながら軽く答えた、ハイネッケンを飲み干して俺は、ボウモア17年を手に取りショットグラスに注いだ。俺は、一口で飲み干した。

「お前も一杯やるか？」俺は、酒が並ぶ棚からスペイサイド愛飲のマツカラン18年を手に取りスペイサイドに聞いた、「いや今日は、酒はもう要らねえ」スペイサイドからは、俺の予想に反した言葉が

返ってきた「どうした？珍しいな」俺の投げ掛けた言葉と同時にス
ペイサイドは、立ち上がりバスルームに向かいながら「明日、朝一
でボスに呼ばれた、お前ももう寝ろ」一言そう言つとバスルームの
ドアを閉めた。間髪入れずもう任務かと思ひながらため息をつき俺
は、自分のベッドに横になった。・・・・・・

「ここに隠れてなさい！何があつても出てきちゃダメよ！」声を潜
めながら母さんは、僕をクローゼットに隠れさせた。玄関からは、
ドアを激しく叩く音ともに怒鳴り声が聞こえる。「お前は、寝室に
入つてろ！」父さんの声が聞こえる、怖かった・・・クローゼットの
扉の隙間から寝室のドアノブをしっかりと握りながら扉を押さえる
母さんの姿が見える、玄関のドアが開いた音が聞こえた瞬間激しい
口論が聞こえてきた。「コラア！！裏切つてただで済むと思つてん
のか！！！」ガラスが割れる音や激しく争つてゐる音が寝室にまで響
き渡つてゐる。母さんは、泣きながら震えてゐる、パン！パン！パン
！三発の銃声が室内に鳴り響いた、「あなた！！」叫びながら母さ
んは、寝室を飛び出した、「いやあー！！！」母さんの悲鳴が聞こ
えた、思わず両手で耳をふさいだ。髪をわしづかみにされた母さん
が男達に寝室に引きずられてきた、心臓が破裂しそうなほど激しく
鼓動してた。母さんは、ベッドに放られた、次の瞬間パン！パン！
パン！パン！と銃声が寝室に鳴り響く・・・「ガキも一匹ゐるはず
だ」１人の男が呟いた。「子ども部屋には、いなかったぜ」もう１
人が答えた。「探せ！どつかに隠れてやがるんだよ」男達が家の中
を探し始めた瞬間、遠くからパトカーのサイレンが複数聞こえてき
た、「チクシヨウ！ジカンギレダ」男がさげんだ「ズラがるぞ」男
達は、足早に家から消えた、ベッドの上の母さんの亡骸は、はつき
りとこつちを向き見開いた眼球は、クローゼットの隙間からでも目
が合つてゐた、僕は、声も出さずひたすら涙だけが流れてた・・・・・・

ベッドから勢いよく起き上がった、「ハア、ハア、ハア」全身から
汗が吹き出し心臓が激しく鼓動してた、喉もカラカラに渴いてゐる。

頭を抱えながら横目で時計を見た午前4時を回ったところだった、ため息を吐き冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出すと勢いよく流し込んだ。左手で顔の汗を拭った、またあの悪夢に魘された、殺しは馴れてしまったが自分の人生を変えた幼い時のあの事件のトラウマからは、いまだ解放されずこの嫌な目覚めを時々味わっている。俺は、タバコに火をつけソファーにぐったりと腰を下ろした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6459y/>

ブラットレイン

2011年11月19日21時38分発行